

「恐れることはない」(要旨)
聖書箇所：マタイの福音書17章1~9節

【1】 キリストの受難を否定したペテロ

主イエスはペテロの「あなたは生ける神の子キリストです。」(マタイ 16:16)という告白の後、ご自分の苦難と死そして復活について語られるようになりました。しかしイエスの受難や十字架の死の予告は、ペテロにとって想定外であり、受け入れ難いものでした。彼は正面から否定してしまいます。

【2】 圧倒的な神の臨在に接したペテロ

そんなペテロを連れて、イエスは祈るために高い山に登られました(ルカ 9:28)。ヤコブとヨハネも一緒です。ゲッセマネの園で十字架を前に祈られたように、そこでも必死に祈っておられたのでしょうか。一方三人の弟子たちは、ゲッセマネの園の時と同様に眠気に襲われようとしていました。しかし彼らは、突然驚くべき光景を目にします。

まずイエスの変貌です。イエスの顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなりました。その姿は地上のものによって形容し尽くすことが困難でした。彼らは、これまで見たこともないイエスの姿、天上におけるイエスの御姿を圧倒的なスケールで見たのでしょうか(黙示録 1:16)。

次にモーセとエリヤの出現です。彼らは旧約聖書を代表する指導者でした。モーセはネボ山で神に見送られるようにして地上生涯を全うした人物(申命記 34:5-6)。エリヤは火の戦車、火の馬の出現と共に竜巻に乗って天へ上っていった人物でした(II 列王 2:11)。ユダヤ人は、神の救いがモーセとエリヤの再来によってもたらされると信じ期待していました。この旧約聖書の二大巨頭が、何とイエスと語り合っている！彼らはまさに、イエスの天上での様子を目にしたのです。

最後に神の御声です。弟子たちは神の臨在をあらわす雲に包まれ、御声を聞きました。エルサレムに向かわれるイエスは、ご自分が何者であるのか、三人の弟子たちに

目に見えるかたちで明らかにされたのです。

【3】 恐れることはない

ペテロは山上で見たキリストの栄光の輝きを、何とか地上に繋ぎ止めようとしてしました。彼はおそらく自分が目にした光景を後世に遺したいと考え幕屋を造ると提案したのでしょうか。すると彼らは雲に包まれました。雲の中で神の御声を聞いた時に、弟子たちはただただ圧倒され、恐れ、ひれ伏すことしかできませんでした。ペテロはこのようにして、「生ける神の子キリスト」がどのようなお方であるのかを知ったのです。

イエスの受難や十字架の死は望ましくないと考えたペテロ。自分の理解できる範囲にイエスを収めようとしたペテロ。ところがこの山上において、神の圧倒的な臨在に接し、自分の理解を遥かに超えた神の計画を耳にしたのです。この日の出来事をルカは次のように記します。「そして、見よ、二人の人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤで、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。」(ルカ 9:31)

「遂げようとしておられる最期」は「成就しようとしている出発(エグダス)」(直訳)と訳すことができます。イエスのエルサレム行きは「最期」であり「出発」なのです。

神の臨在の前でただただ恐れる弟子たち。そんな彼らにイエスは近づき触れてくださいました。そして「恐れることはない」と、いつもの声で励ましてくださったのです。

▷私たちは、自分の理解できる範囲に神を収めようとしてします。しかし神は人間の枠に収まるようなお方ではありません。私たちの理解を超えたお方です。しかし同時に、今日も私たちに近づいてくださり、「恐れることはない」と親しく語りかけてくださるお方でもあるのです。

